北方ユーラシヤのカムケラミークに就いて

澄田正一

序

ひろくユーラシヤ大陸の新石器時代文化を大觀する時、三分される地理的環境の差異が、三つの考古學的遺物によつて表徵される文化の差異に相應じてゐることを知る。すなはち、森林地帶に分布する櫛目文土器(Kammkeramik)・沙漠草原地帶に發見される細石器(Microlith)・河川沃野地帶に定着の彩陶(Painted Pottery)を意味することは、人々の知る所である。[1] 而もかやうな廣大な大陸にわたつて分布した、文化乃至はそれぞれの文化を表徵する考古學的遺物の示す形式の意欲に人々は驚異の感をいだくのも勿論であらう。それと共に、私のもつ考古學的遺物の形式への關心も、根源を探れば、そこから出發することを思ふのである。

當時の人々の營んだ生活内容も、やはり、われわれの想像を絶して複雜であつたらうが、そして又、その生活内容を十全に復原することはわれわれには到底不可能であらうが、かへつてそのほんの一部のものが今日に殘されたことによつて、當時の人々の生活内容は表徵的に純化され、文字通りデッサンの形式に、われわれは直面することができるわけである。例へば、藝術創作に於ける形式の發見が、如何に嚴しい「視覺を通じての純化」であるかを思ふ時、考古學的遺物は、むしろ、純化されたすがたもて、われわれの前に提示されるのである。當時の生活内容に比すれば、ほんの一部であるが故に殆ど何も判らないであらうと常識人は斷ずるかもしれないが、私にとつては逆に、ほんの一部

のものではあつてもかへつてデッサン　形式にぎりぎりに純化されてゐるが故に、考古學的遺物への魅力がますます深まつて行く。北方ユーラシヤの森林地帶に廣布したカムケラミークをもつた生活も、當時の生活內容そのままに直面せしめられたと假定する時、われわれは果して、カムケラミークに表徵されると同樣の純化された生活の形式を發見することができたであらうか、現代史把握の混亂を思ふがよい。原始的な生活の時代であつたならばと云ふ人があるかもしれないが現代未開社會の研究が如何に困難であるかを知るがよい。ともかく、北方ユーラシヤ大陸に廣布する新石器時代文化が、カムケラミークなる土器の形式に、純化されたデッサンとして與へられてゐる。われわれはこれに對して何を爲さう。私は、そのデッサンの形式を、私なりに忠實に見ようと思ふ。何故ならば、從來カムケラミークなる呼稱により、人々は簡單にそれを云々して來た。純化された筈の形式であつたが、私にはかへつてあいまい不純な呼稱にすぎなかつた。私は、私なりに、それを明確につかみたいのである。

註

①この問題に關して、主として沙漠草原地帶と河川沃野地帶についてであるが、精彩な構想を展開されたのは江上波夫氏である。平凡社刊『世界歷史大系』(2)——東洋考古學——第四章「東洋考古學の意義」參照。

一

われわれが櫛目文土器（カムケラミーク）を取上げる場合、先づ問題となるのは北歐に於ける樣相であり、而も、その形式を要素的に把握せんとすれば、フィンランドのそれが理解を容易ならしめるであらう。①

フィンランドに於けるカムケラミークの主要な文樣要素は

(A)櫛齒印刻文 (Kammartigen, gezähnten Stempel)

(B)凹窩文 (Grübchen)

より構成される。そしてこの二つの要素のうち、櫛齒施文は、ヨーロッパに普遍的な所謂齒狀意匠 (Zahnstempelmotiv) に屬する一現象である。前記(A)(B)二つの要素を中心として、形式學的編年がなされてゐる。すなはち、

(I)前期カムケラミーク (Frühkammkeramik)

(Ⅱ)盛期カムケラミーク (Typische Kammk.)
(Ⅲ)後期カムケラミーク (Degenerierte Kammk.)

の三時期に大別せられる。而も、この編年に於いて注意すべきは、單に土器のみの形式推移によるそれではなくて、それぞれの時期の遺跡立地の高度が「リトリナ限界」"Litorina Grenze"と對比されて、その比高が考慮されてゐる點である。

フィンランドに於いては、カムケラミーク文化はシュオムスイェルヴィ文化 (Suomusjärvi-Kultur) に續く文化であり、このシュオムスイェルヴィ文化は貝塚文化乃至キャムピニィ文化 (Campigny Kultur) の一變種であり、「リトリナ限界」(標高三四・五米) に對して八七—八四%の高度に遺跡は發見され、土器は未だ知られてゐない。これに次いだ前期カムケラミークを出土する住居址のうち、最高は「リトリナ限界」の八七—七六%に發見されてゐる。前期カムケラミークに屬するものの主要形態は、尖底②或ひは丸底を呈する「卵形の甕」(eiförmigen Kessel) であり、土質はかなり大粒の砂を混じて硬く緊密である。粘土の色は灰褐色を呈し、壁面は暗黑色で一部は赭紅色に變る。施文は印刻文 (Stempeleindrücke)・凹窩文 (Grübchen)・撚糸文 (Wickelschnur; mit einem Stäbchen oder einer Kernschnur, die mit einer zweifadigen Schnur umwickelt ist.) である。これらの施文のうち、撚糸文は、カレリヤ・ラドガ湖周邊の地域に於いてはカムケラミーク終末期にまで存續し中部ロシヤにても主要な役割を果してゐる。而して、西部フィンランドの撚糸文はカレリヤやロシヤのものよりも古く、從つてこの文様は本來海岸的なものであつて、バルト海方面から東へと波及したもので、カムケラミーク文化の諸要素のうちでも西方系と思はれる。

そして、前期カムケラミークも、時代と共に、土質は細砂を混入して細密となる。而も、西部フィンランドにては、撚糸文は消失し、凹窩文も缺除し、それに反して櫛齒印刻文が普及して來る。施文具としても、多齒の櫛齒が使用され、今までは數本の棒が結束されて櫛齒狀施文が印刻されてゐたのであるが、文字通りの櫛齒印刻文 (Kammstempel) が出現し、且文様帶の

幅も廣くなつて、撚糸文様を思はせるものとなり。むしろ、それを模した如きものとなる。而して垂直方向の施文はなくなり、器體を水平位にめぐる廻轉文様が盛行しはぢめて、この傾向こそは、次の盛期カムケラミークには顯著となり、完成する様相に外ならない。

盛期カムケラミークの立地高度は、「リトリナ限界」の七五—六八%である。土器は、砂粒の混入がより適度となり、燒成も良好で赤褐色を呈する。凹窩文が再び現はれ、櫛齒文帶間に、水平位に並列する。器體の大きさもマキシマムに達して三六—四〇立の容量のものがある。[3] 施文は、幾何學的諸文様帶と凹窩文列とが器體をめぐつてゐる。かかる「幾何學的カムケラミーク」"Geometrische Kammk." こそ、最盛期の段階を示すもので、南部カレリヤや內陸の湖沼畔に發見され、海岸遺跡からは未發見である。この盛期カムケラミークの出土は西部フィンランドにては稀であつて、既に述べた如く、西部にては東部よりも前期カムケラミークがながく存續し盛期のものは東部よりも遲く達してゐる。フィンランドに關して云ふならば、ラドガ湖西方の南部カレリヤがこの様式の分布中心と考へられる。盛期のものも、時代の推移と共に、器體は小形となり、器壁も漸次薄くなり、砂粒の混入も少くなる。

後期カムケラミークは、西部フィンランドにのみ認められ、Nyland から Sudösterbotten にいたる海岸遺跡から出土し、遺跡高度は「リトリナ限界」の六八—六四%に位置する。この期には、櫛齒印刻文がなくなり、凹窩文が主要な役割を演ずるにいたる。土質に關しては、多孔性 (Porositat) が一般的な特徴であるが、これは石灰質の碎片を混有することと關係があり、燒成後の土器が、長期にわたつての土中埋沒の間に、石灰質の挾雜物の溶解し去つたがためである。かかる石灰質の碎片としては、石灰岩・貝殼・骨等が擧げられる。器形は、やはり、丸底もしくは尖底に近いものがあり、口緣部が一樣に厚くなる。又、壁面は比較的滑澤があり、殆んど磨研のあとの觀を呈する。燒成概して不良にして、暗灰褐色の色調を呈する。水平位の凹窩文列が施されてゐるが、凹窩の刺突は小形となり、むしろ點列文へと萎縮する傾向を示してゐる。而して

フィンランドにては、土器は質的に退化すると同時に量的にも稀少となり、それに比して、石器は多量となる。中部ロシヤ＝オロネッツ地方の凹窩文土器（Grübchenkeramik）がカレリヤ地方へ影響したのは、一部は盛期カムケラミークの頃にあつて、後期カムケラミークの時期に及んでは凹窩文が文様の主要素となり、西部フィンランドにては „Uskelakeramik“ なる呼稱をもつ後期カムケラミークの成立となつたわけである。

而して、西部フィンランドに於けるカムケラミークの發展は、新たなる「舟形斧文化」„Bootaxt-Kultur“④によつて斷たれるのであつて、この新しい文化は、中歐繩文系土器文化の一枝派である。遺跡の立地も水邊を去つて肥沃な混砂粘土（Lehmboden）が選擇され、從つて、生業形態も、從來の漁撈が副次となり、新來者は牧畜民であり農耕民である。この舟形斧文化に屬する繩文土器（Schnurkeramik）は、末期カムケラミークよりも高度の低い遺跡より出土し、「リトリナ限界」の六〇—五〇％に立地する。層序的にも、カムケラミークより後期である。⑤

以上を要するに、盛期カムケラミークの幾何學的文様構成は、櫛齒印刻文帶と凹窩文帶とが交互に器體をめぐることに表徵されるが、この文様構成にフィンランドカムケラミークの様式の把握が集中される。而も東部フィンランドのカレリヤ地方が、盛期のそれの分布中心であり、成立地域であることを知る。この盛期のものの文様要素のうち、櫛齒印刻文の出現が、前期カムケラミークの單なる印刻文と撚糸文とにあること即ち、撚糸文帶の印刻文による模倣が、櫛齒印刻文帶を導いたことを推すことができる。他の文様要素たる凹窩文は、中部ロシヤからの影響であつた。そして、撚糸文も西方から海岸傳ひの波及であり、印刻文はヨーロッパにひろく分布した齒狀意匠に淵源するものであつた。かうした諸要素の交錯融合のうちに、東部フィンランドのカレリヤ地方に於いて、櫛齒印刻文帶と凹窩文帶との整然たる幾何學的構成を示す、盛期カムケラミークが成立したのである。

盛期カムケラミークに次いだ後期のそれは、凹窩文

がむしろ萎縮したと考へられる點列文をもつ土器であつて、これは西部フィンランドに發達する。東部ロシヤからの凹窩文の影響は、東部フィンランドに於いては、盛期の樣式を生む一契機であつたが、西部フィンランドにては、それは、後期の樣式を成立せしめる地盤となつたのである。盛期のそれが海岸遺跡に未發見であるに對して、後期に屬するものが殆んど海岸に沿うてであることも注意される。

貝塚文化に次ぐ前期カムケラミークの頃、フィンランドは印刻文・撚糸文・凹窩文の三者が雜然と分布しその三要素のなかから、東部に於いては盛期の樣式が創造され、西部は比較的ながく前期の樣相が存續して——尤も、撚糸文と凹窩文とは漸次一應なくなつたのではあるが——、後期の所謂 Uskelakeramik に代表される土器の發達を見たわけである。そして、中歐から新來の舟形斧文化に取つて代られたのである。

註

① かかる要請に應ずるものとして、Aarne Europaeus-Äyräpää の勞作 „Die relative Chronologie der Steinzeitlichen Keramik in Finnland“ (Acta Archaeologica, vol. I. 1930) が擧げられる。同氏は別に、Reallexikon, Bd. VI に於いても、„Kammkeramik“ の項を擔當して簡潔な記述をなしてゐる。氏の石器時代研究は、アイリオ氏とは對照的に、考古學的資料から出發して自然史を補助學として體系を組立ててゐる。氏はスェーデン學派ではなくしてデンマーク學派に屬し、Sophus Müller 一派の編年を奉じてゐる。氏には前記論文の外に、E. S. A. 8 に載せたロシヤに於ける闘斧文化 (Streit Kultur) に關する大作が擧げられる。(A. M. Tallgren; Geschichte der antiquarischen Forschung in Finnland. E. S. A. X, 1936 參照)

② 北歐に於いては、ヨルジヤ期・アンシルス期に次いで、リトリナ期になると土地が再び沈降し始めて、所謂「リトリナ海」は現在のバルチック海よりも廣く、カキ其他の貝類が繁殖し「リトリナ」„Litorina litorea“ なる貝名によつて海名・期名が名付けられたのである、デンマークの貝塚が築成されたのは主にこの時期である。S・ミュラーの擧げる有名な北歐貝塚期土器が尖底を呈してゐることは衆知に屬する。

③ Acta Arch., vol. I, Abb. 參照。

④ A. Europaeus; Bootaxt-Kultur (Reallexikon Bd. II 並びに W. Bremer; Schnurkeramik (Reallexikon Bd. XI) 參照。

⑤ 南西部フィンランドのカムケラミーク分布地帶に舟形斧文

化を擔つたインドゲルマンの移住を見たのは、モンテリュースの石器時代編年の第三期中葉と云はれる。この舟形斧文化が、新石器時代末期に、フィンランド西南部の海岸地帶に於ては、"Kiukainen Gruppe"と呼稱される文化形態を現出せしめるわけである。この文化形態こそ、南西部フィンランドのカムケラミーク文化の要素と新來の舟形斧文化との融合文化に外ならない。K.-G. の土器には、繩文系土器よりはカムケラミークの傳統がより明瞭に認められ、砂粒を混じた粗糙の土器で、凹點文がやはり主要な文様モティーフである。器底に印せられた網目文によって"Textil-Keramik"との接觸もうかがへる。A. Europaens Kiukainen-Gruppe (Reallexikon Bd. VI) 及び A. Europaens; Bootaxt-Kultur (Reallexikon Bd. II) 參照。

二

アイリオ氏は、カムケラミークなる土器様式の發生地をヴォルガ河上流・オカ河流域に比定してゐる。[1] 而も又、カムケラミークの文様の成立を撚糸文と凹窩文との二つのモティーフが基礎となり或ひは模倣されて櫛齒印刻文様へと導かれたことを推測してゐる。前二者の夫々を主要文様とする土器は、純然たるカムケラミークと共に、多數、さきの兩河川の地域に出土する事實にもとづいて、氏は、その發生地をも考へたわけである。

氏も亦、フィンランドの場合と同様、ロシヤ=カムケラミークの前・盛・後の三時期 (Die frühe K., Die gute K., Die spätere K.) に分類してゐる。そして、やはり、櫛齒印刻文様がティポロギッシュには撚糸文に由來せることを主張してゐるが、何故ならば、カムケラミーク早期のものに、撚糸文に類似した、かなり幅廣の、むしろ卵形の、櫛齒印刻文様の認められる點よりさうした由來の事情が推測されるからである。前期のものに於いては、櫛齒意匠は多くは單獨には出現せずして、凹窩文に從屬して新出のエレメントとして併せ施されてゐる。[2] 而して、Wolosowo や Plechanow Bor の質土粗器には、約一糎幅の撚糸意匠と、間隙のひろい櫛齒文様とが見出されるが、これは純然たるカムケラミークの櫛齒印刻文様ではなくて、むしろその先行形式と考へられる。Wolosowo の土器は、比較的に原始的様相を示し、殊に、櫛齒印刻文のみ施したものは粗大の感を呈する。

盛期カムケラミークが、櫛齒意匠と凹窩意匠とが交

互に水平位に施文され、而もそれが、幾何學的文様構成をとつてゐることは、フィンランドの場合と同様で、アイリオ氏も、亦「幾何學的カムケラミーク」„Die geometrische od. beste kammkeramik“なる呼稱を與へてゐる。かやうな盛期カムケラミークの並行形式としての、その一變種に、櫛齒意匠に代つて細條線の用ひられた「條線文カムケラミーク」“Die linear-ornamental kammk.“が常に僅かではあるが、東バルト、ヴォルガ河上流、オカ河、ラドガ湖地帶、オロネッツ、シベリヤ等に分布してゐる。この種の土器と盛期カムケラミークとの間には、新古の差異は認められない。

後期の土器は、土質が概して良好となり、石綿滑石その他 Strahlstein-Muskovit を含有し、時には貝殼片を含んだ場合も見受けられる。器壁は薄手となり、色調は淡紅色もしくは暗紅色を呈する。器形にも稍變異が認められて、甕形皿形であり、底部は丸底もしくは平底である。施文は器體上半部に限られるものが多くなり、さもなくば全く無文である。凹窩文はより稀少となる。その故は、例へば石綿とか Strahlstein を含有する土器に於いては、それらの含有物のために深い刻文が困難だつたからであらう。一般に、櫛齒印刻文は器面に輕く施され、種々の櫛齒意匠は一つの幅ひろい帶に、時には又、波狀帶に組込まれてゐる。そして、櫛齒文帶相互の間には、一條もしくは數條の波狀線が描かれてゐる場合もある。何れにせよ、後期カムケラミークには、他の土器形式と融合形式（ミッシュンユナイル）が現れて來る。

アイリオ氏をして云はしむれば、ヴォルガ河上流・オカ河流域がカムケラミークなる土器形式の發生地であるとしてゐるが、その中部ロシヤに於いても、フィンランドの場合と相似た前期盛期後期の發展過程を經てゐることを知るわけである。撚糸文凹窩文の早期の土器に、比較的粗大の櫛齒印刻文が、從屬的に、併用され、或ひは又、撚糸文を模倣するが如くに、施文されつつ、カムケラミークに於ける純然たる櫛齒意匠が成立したのである。そして、櫛齒印刻文帶と凹窩文帶との整然たる幾何學的構成をもつ盛期カムケラミーク

の様相は、フィンランドのそれと一致して、後期へと移行する。然し後期に於いては、西部フィンランドの場合、凹窩意匠の退化した點列文體であるのに對して、中部ロシヤのものは、土質中の含有物のため凹窩文の施文が困難なためか、凹窩文は稀少となる傾向を示してゐる。とは云へ、兩地域共に、文様の具合に末期的施文の様子を看取できるのである。

かくて考へられることは、カムケラミークの發生地と考へられる中部ロシヤに於いても、その様式の完成された地域と推されるフィンランドにても、この土器の文様の主要要素が櫛齒印刻文と凹窩文とであること、そして又、この土器の文様が、撚糸文と櫛齒印刻文と凹窩文との三者の種々の構成系列をとりつつ、前・中・後の三期・の段階を形成してゐることを知ることができたのである。私の指摘したい點がここにある。われわれが普通カムケラミークなる呼稱を、輕卒に、使用する場合、その土器の概念は、櫛齒印刻文のみを中心として考へ勝ちである。カム=ケラミークなる言葉によつて「櫛齒」"kamm"の魔術にかかつた如き先入觀を、われわれは先ず放棄することが必要と思ふ。既に述べた如く、カムケラミークなる形式に於いては、その文様要素は決して櫛齒印刻文帶が主導するものではなく、盛期のものに於いても、凹窩文帶と並列するものであり、又、前期にてはむしろ撚糸文や凹窩文に從屬的であり、後期の様相は、中部ロシヤにては、退化の影濃く器面に輕く器體の一部に施されたり或ひは無文であつたりし、フィンランドにては凹窩文系の點列文が主である。そこで今一度私は繰りかへしたい。カムケラミークなる形式の典型が、盛期のそれによつて示現される如く、櫛齒印刻文帶と凹窩文帶とが交互に、而も、水平位に施されて、整然たる幾何學的文様構成をとるものであることを先ず念頭に置くべきこと。而も、前中後三期にわたつて編年されるカムケラミークの發展系列を考慮する時、撚糸文・凹窩文・櫛齒印刻文の三者の組合せよりなることをも考へるべきである。櫛齒印刻文がヨーロッパに廣布する齒狀意匠に屬することは勿論であるが、それのみの主導によるカムケラミークの成立ではなかつた。ウクライナ出

土々器のうちに、盛期カムケラミークに類似した文様を見るが、これがカムケラミークに所屬せずして別の系統に屬するものであることを併せ考へてほしい。

註

① J. Ailio; Fragen der Russischen Steinzeit (S. M. Y. A. 29. 1922) に據る。この論考は、A・オイロペウスの研究が主としてフィンランドのカムケラミークに就いてであつたのに比して、より廣範圍に、すなはちロシヤ領内のそれに關してである。

氏は、言ふまでもなく、フィンランドに於ける石器時代研究の建設者である。氏は石器時代研究に於いて、古生物學への關心と共に、鑛物學、地質學を出發點とし、それらとの關聯に於いてなしたのである。氏はスカンヂナヴィアへの旅行によつて形態學的研究法を學び、それをフィンランドの石器時代資料に應用してゐる。形態學(Typologie)は氏にとつては極めて正確な方法であり、遺物の形態とは、嚴密な自然法則にしたがつた、獨立した生命をもつものと考へられた。氏は又デンマークの精密な發掘方法を學び、それをフィンランドに紹介してゐる。多年にわたつた基礎的研究の後、"Die steinzeitlichen Wohnplatzfunde in Finnland I—II"を公表してゐる。一九一三年には三ケ年にわたるロシヤへの研究旅行をなし、ヨーロッパ=ロシヤの博物館を遍歷してゐる。實地の發掘調査は困難であつたため、博物館に蒐集されてゐた遺物を形態分類して體系づけたにすぎなかつた。その研究が前記論文であり、遺物の形態學的研究であつて、スカンヂナヴィアの石器時代研究成果をかりてなしたもので、この處置が妥當なものであるか否かは疑問である。編年についても同樣で、本來スカンヂナヴィアに於いて完成された結果を、別に證明することもなく、ヨーロッパ=ロシヤやシベリヤの場合にあてはめたのであつた。(A. M. Tallgren; op. cit. 參照)

尙、大山柏氏は「史前學雜誌」(第一卷一・二・五號、第二卷第三號、第四卷第三・四號)に「櫛目文土器資料集成」をなされてゐるが、主としてアイリオ氏の前揭論文に據られ、別に O. F. Gandert; Beitrag zur Kenntnis der jüngeren Steinzeit in Sibirien (Studien zur vorgeschichtlichen Archaeologie 1925) 並びに後出する Otto Bahder の二篇を引用參照されてゐる。

② Wolosowo の遺跡群に關する最初の報告は、P. Kondriavtsev; Les vestiges du l'home préhistorique de l'age de la pierre près du village volosoa district et gouv. du Vladimir. (Congr. Inter. Arch. e. Anthr. Moscow. Tom. III) であるが、この一文は山口隆一氏の譯文となつて「史前學雜誌」(第八卷第三號)に揭載されてゐる。

三

ヴォルガ河上流オカ河流域に於いて發生成立したと推されるカムケラミークは、Bottnischen u. Rigasc-

hen Busen からオビ河にまで、更にイェニセイ河にまで、そして又、北氷洋からオカ河流域にわたる範圍に、廣大な分布を見たのである。而して、その分布波及の道程に於いて、ウラル山脈はさしたる障壁とはならず、右の分布圏内に形式の一樣性を示現してゐる。この分布圏は大體北方ユーラシヤの森林地帶と一致し、北の限界はツンドラ地帶にも及んでゐる (Pasvik-Elv 及びオビ河口の發見遺物により)。中部ロシヤとフィンランド南部とのカムケラミーク分布中心地は、その大部分が濶葉樹地帶 (Lanbholz-gebiet) であり、その一部は針葉樹地帶 (Nadelholz-gebiet) で、北部ロシヤやシベリヤの遺跡も主として針葉樹地帶である。而して、針葉樹地帶やツンドラ地帶への波及は漸く後期カムケラミークの時期に比定され、又、オビ河口のものはシベリヤよりも時期の早いものと思はれる。そしてヨーロッパ=ロシヤ北部からシベリヤへの波及は、Usa 河・Pečora 河支流に沿うてなされたであらう。

中部ロシヤ、すなはち、カスピ海及び黑海に注ぐ河川流域のうち、ヴォルガ河上流とならんでオカ峽谷とが地理的優越性を占め、就中オカ峽谷は、Potjakow の指摘する如く、先史時代人にとつてはヴォルガ河よりは居住により適當してゐて、更に、カザン地方並びにキエフ地方と密接な交渉をもち、又これら兩地方を越えてその南方の地域との交渉の可能性が豫想されるのである。同樣に、フィンランドとオロネッツ地方も亦、スカンヂナヴィアや中歐と接近し、且、多くの水流及び森林の存在とは新石器時代の住居址文化をよく形成・發達せしめ得たわけである。かくて、二つのカムケラミークの中心地帶即ち中部ロシヤとフィンランド南部とは、前述せる如く、地理的に優越性を示してゐる。

オカ河流域の代表遺跡たる Wolosowo には、カムケラミークの先行土器と思はれる凹窩文土器と撚糸文土器とが發見され、盛期カムケラミークたる „typ. kammk." はむしろ缺除し、僅かにその變種が認められる。それに對して、ラドガ湖付近に云はばローカルな特殊形式として成立した盛期カムケラミークは、そこから北部ヨーロッパ=ロシヤや東バルトへと分布し

たわけで、カムケラミークの發展段階としては後期にいたつて、その分布は最大の範圍に達したのである。故に、カムケラミークの分布した全域から云ふならば、„typ. kammk.“は「西方的なバルト圏」„eine westliche, baltische Zone“を形成してゐる。

カムケラミークの分布圏に關して述べて來たが、大體北方ユーラシヤの森林地帶に屬し、且又、中部ロシヤやフィンランド南部の兩地方すなはちカムケラミーク盛行の二つの中心地域は、その大半が濶葉樹林帶で一部は針葉樹林帶であつた。その他は針葉樹林帶であり、ツンドラ地帶にも及んでゐることを知ることができた。そして、整然たる幾何學的文様構成をとる盛期の所謂„typ. k.-k.“は、カムケラミーク分布圏内にては、むしろ西方的な、云はば「バルト圏」を形成するローカルな形式を示すものであつた。又、カムケラミークがあのやうな廣大な分布圏を文様形式の一様性もて形成し得たのは、後期の段階に於いてであり、而もその波及は主として森林地帶の河流を通じてであつた。このカムケラミーク系文化の荷擔者を、アイリオ氏をはじめ一般フィンランド諸學者は、„finnisch ugrische Urvolk“と推してゐる。

アイリオ氏が、カムケラミーク成立のウア=ハイマートと推す、オカ河流域に於ける遺跡の實際について、次に觸れて見よう。このオカ河流域に於ける新石器時代住居址は、[1] 大體、次の四地域[2]すなはち

i) Balachna
ii) Vjasniki
iii) Murom
iv) Meščera

に集中してゐる。それらの遺跡出土土器のうちに、カムケラミークが勿論擧げられる。それは主として「櫛齒=凹窩文土器」„Kamm-Grübchen Keramik“と類別呼稱される如きものである。カムケラミークを出土した住居址二十六ケ所のうち、二ケ所が河流に沿ひ、他は全て湖岸に發見され、何れも砂層(Sandboden)に立地する。それら二十六の遺跡は、從つて、砂丘遺跡(Dünen-bildungen)であり、少數の遺跡が草地(Wiesen-terassen)にあり、それも例へば、四ケ所の草地遺

跡のうち、三例が水邊の低い草地であり、一例が比較的高い草地にあつた。そして住居址立地の高度は、

(1) 水面より一米の高さの低地遺跡

(2) 水面より一米乃至數米の高さの中間高度の遺跡

(3) 水面より一〇米以上の高度の遺跡

の三つの場合に區分される。概して、古い住居址は低く、時代と共に、立地の高度は高くなる傾向を示してゐる。カムケラミークを出土する遺跡のうち、多くは盛期もしくは後期のものであつて、前期のものも僅少なれども勿論發見されてゐる。又、カムケラミーク出土遺跡二十六ケ所のうち、十九ケ所が單純遺跡であり、他の七ケ所が他の土器との複合遺跡である。そしてカムケラミーク出土遺跡は、さきにあげた四地域のうち、Balachna 地方と Meščera 地方とに特に群集し、他の地方にも出土し、正に、オカ河流域に於けるローカルな新石器文化のメルクマールである。この形式はその地方にては永く存續すると共に、又後の金屬器文化とも並行しつつ融合の過程を辿つてゐる。

私は既に、フィンランドのカムケラミークを「リトリナ限界」との比高によつて、形式の推移を考へたのであるが、今や更に、カムケラミーク分布圏内——中部ロシヤとフィンランドとを中心として——に於ける分布の樣相を大觀しつつ、且は、オカ河流域の遺跡立地の狀態を考へて、ここにいたつた。そして要約できることは、森林地帶に於ける水邊に沿ふ砂丘地帶が、カムケラミークに對しては、本來の自然環境であり、從つて又、その波及が河流乃至は湖海に沿うてであることであつた。そしてカムケラミーク全般から云ふならば、形式としては、撚糸文・凹窩文・櫛齒印刻文三者によつて構成される施文をもち、卵形の甕形器形——尖底もしくは丸底——がその主導的器形の土器に表徵される遺物群であり、それらの遺物群が又森林地帶の水邊に沿ふ砂丘遺跡と結合されて把握さるべきことを述べて來た。貝塚文化の一變種としてのシュオムスイェルヴィ文化に、後續するカムケラミークの、前期的な形式の成立が、先ずヴォルガ上流・オカ河流域に於いてであり、その波及は、カレリヤ地方に於いて、盛期的な形式を「バルト圏」を形成しつつ成立せしめ

て、かくて後期の段階は、正に、北方ユーラシヤの森林地帶と相應ずる廣ばうに分布したのであつた。アイリオ氏は、モンテリュースによる北歐新石器時代の編年體系③と對比して、カムケラミークの初期段階をその第二期に屬せしめ、盛行した時期は第三期であり恐らく第四期も同樣たらんとし、その退化形式は新石器時代の後にも尙存續すると云つてゐる。

註

① Otto Bahder; Zur Erforschung der neolithischen Wohnplätze in Okatale (E.S.A.4, 1929) に據る。この報文は大山柏氏により前掲の「史前學雜誌」(第四卷第三・四號) に抄譯紹介されてゐる。

② ibid. Abb. 1 參照

③ Oscar Montelius は、北歐の新石器時代を、石斧の形態を主として四期に區分して、

第一期 (The Period of Round Axes) (Earth tombs)

第二期 (The Dolmen Period) (Thin-necked Axes)

第三期 (The Gallery-Grave Period) (Thick-necked Axes) (Double-edged and Boat-shaped Axes with a Shaft-hole)

第四期 (The Cist Period) (Thick-necked Axes and Daggers of Flint)

となしてゐる。北歐に於いて、中石器時代より新石器時代を經て金石併用時代にわたる研究には、常に諸學者の據るところの編年體系であることは言ふまでもない。ただ私は、諸學者の諸論考により、モンテリュースの編年體系の論ずることは知つてゐたが、その原典が何であるかが判らなかつたが、梅原教授よりの御教示により、"Swedish Antiquities" (Stockholm 1922) であることを知り、あまつさえ同教授より貸與されて、"Later Stone Age" の章により充分なる知見を得たわけである。而も、モンテリュースは、發掘狀態によるに非れば明確な編年の決定は困難であり、從つて次善的に、形態の排列により形態發展を考察せんとしたものである意味のことを、特に述べてゐる。(六頁)。

四

中部ロシヤとフィンランド南部とに、その分布の中心を置いたカムケラミークは、北方ユーラシヤの森林地帶に、ほぼ一致して分布してゐることを既に述べて來たが、そして又、さうした廣大な分布圈を形成し得た時期は、後期に於いてであつたが、その分布波及の樣相をシベリヤに關して述べて見よう。①

西部シベリヤに於ける代表的遺跡としては、オビ灣沿岸の Warkuta の遺跡であるが、その立地景觀は

ツンドラ地帶の砂丘である。出土々器に二種類が區別でき、一つは厚手で簡單に施文された土器であり、他はテクニークも裝飾文樣も共に極めて良好なものとであるが、後者は金屬器片と共に發見されて時代の下るものと思はれる。前者は色調黃褐色を呈し、含有物質も粗大なものは含まずして土質は良好である。凹窩文や櫛齒印刻文等を施した甕形器形は、正に、盛期カムケラミークと一致して並行するものである。又、波狀文の具合によつて、後期カムケラミークに比定されるものも見出される。トボルスク附近の Cuwaskij Mys 出土の美しい壺形土器は、平底にして、土質も細密な黃褐色土器であり、器體上部に、規則正しく、櫛齒樣式の風を思はせる文樣が施されてゐる。相似た土器が、ウラルに發見されてゐるが、それは、カムケラミーク文化の系統に屬するものではなく、南の文化圈に系統づけられるものと思はれる。例へば、セミパラテインスの地方の Karadzăr 土器は、良質の土質であり、櫛齒施文と幅廣の條線文とが認められるが、南のトリポリエ文化の刻線文土器を暗示せしめる。斯樣に、同地方からはカムケラミークを思はせる如き土器が出土してゐるが、色調は紅味を帶び、平底にして、決してカムケラミークではない。

次に、中部シベリヤの、イェニセイ河流域に於ける著名な遺跡としては、クラスノヤルスク地方とミヌシンスク地方とが擧げられる。これらの遺跡から發見される土器は、勿論、カムケラミークの印象を強く與へるものではあるが、そこには、異質的な或ひはローカルな特徴が甚しい。そして、稀に、„typ. Kamm-k.“ もしくは „linearornament Kämm-k.“ と對比せしめられるものもあるが、大部分は、末期的な樣相を帶びたものである。而も又、かやうな樣相こそウラルや南ロシヤと親緣關係深きことを物語つてゐる。かくて推論できることは大半の土器が明らかにカムケラミークの本態からは除外されるものであつたり、或ひは、恐らく時代の下るものである。大部分のものが、末期的な樣相を帶びた後期カムケラミークであり、例へば間延びした櫛齒施文帶や波狀形のジッグザッグ線文やその他特殊な意匠文樣等が、そのことを物語つてゐ

る。そうした様相は、確かに、南ロシヤとの關係を暗示するものである。

イェニセイ地方(Jenissei-Gebiet)の二つの文化圈、„Krasnojarsker Kreis“と„Minusinsker Kreis„とに關して、更に記述を進めよう。

クラスノヤルスク文化圈——

土器は弱い燒成にして灰色もしくは赤黃色を呈し、稀に、厚手で砂粒を含有するものがある。外壁は大抵光澤あり。器壁の厚さは五——八粍が普通で、一二——一四粍のものも存する。施文は勿論櫛齒施文が優勢を示してゐる。尖底の土器には、大抵、器體全面に施文されてゐる。文様が緣邊部に限られるものは丸底のもの多く、平底を呈するものには緣邊施文並びに全面施文が見出される。器形に一種の口緣凝縮(Randsaumverdickungen)——口緣部が稍收縮して腹部のふくれ出たもの——が認められ、鋭利な櫛齒印刻施文と共に刺突文(Stäbchendruck)も優勢を保ち、後述するUlan-chadaの第九層に平行關係が推される。突瘤施文(Lochbuckel)——壁の表裏兩面に施されたもの——も大きい役割を果してゐる。上述した如く、形態的に、文様的に、將又技術的に、種々の要素の混合した土器類を、何ら發掘による層序の傍證なしに、分類することは殆んど不可能ではあるが、ただ燒成が良好となるにしたがつて幾何學的文様配置をとつて側面形の變化に富むものを、より發達した段階のものとすることはできよう。極めて良質の土器になつてくると文様のなくなる傾向が甚しく、それはミヌシンスク文化圈との對比によつて、早くとも青銅器時代のもの、乃至は恐らく鐵器時代にも比定せられるであらう。

ミヌシンスク文化圈——

この文化圈内にては、純然たる新石器時代に屬すると推される土器片は、全く單獨出土の狀態で採集されるにすぎず、やはり櫛齒施文が特徵的である。この地方に於ける鐵器時代土器には櫛齒施文が傳承されてゐるが、粗くて、その使用も減少してゐる。器壁の厚さは八——一二粍が普通で、一五粍のものもある。非常に堅い燒成を示してゐる。中に、恐らく初期金屬器時代と思はれる一群にして、所謂「アンドロノヴァ土器」

"Andronova-Keramik" と關係あるものには、幾何學的な廻轉印刻施文 (Rollstempel-dekor) がある。

さて、カムケラミーク系文化は優勢な力もて西方から波及したのではあるが、ウラル山脈も何ら波及の障害となることなく、イェニセイにまで達し、アンガラ地方を經てバイカルにまで及んだのである。かくも廣大な範圍にわたつて分布したカムケラミーク系文化は、その施文樣式の統一性をよく示して、而もフィンランド或ひはヨーロッパ=ロシヤ北部からシベリヤ方面への波及が、Kolwa 及びオビ河デルタに於ける發見遺跡によつて、Pečora 河の支流 Usa 河に沿うてであることを知ることができる。

バイカル=アンガラ地方の遺跡としてはUlan=Chada が先づ擧げられる。この遺跡包含層は、ペトリィ (Petri) により、十一の文化層に區分されたが、それぞれの文化層は、遺物を全然包含しない間層による中斷がなく、漸移的に相關聯した狀態であつた。最下層たる第十一層には土器の包含は認められなかつた。そして、土器文樣を全般的に觀る時、刺突による (aus Stäbchendruck) ものが遙かに優勢を占め、次いでは撚糸による (aus Flechtwerkabdruck) ものであり、最後に櫛齒による (aus Kammstempel) ものの順序である。櫛齒施文は第十層に撚糸施文と共に初現し、下層土器にては器體上部に限られるが、中層の土器では全面に施文され、上層より檢出の土器にては施文は稀少となる傾向を示してゐる。形態は胴腹部に稍ゝふくれを見せて口緣の緊り氣味のもの、更に多い器形としては、側壁が直であつて截頭卵形のものがあり、底部は尖り氣味の丸底であつて平底は見出されない。次にアンガラ地方の Čadobec の遺跡出土の土器は、段階的に、變移を示す狀態で檢出されてゐる。櫛齒施文はバイカル地方よりもより多くあらはれ、クラスノヤルスク地方よりも稍ゝ頻出し、確かに橫帶狀の施文構成をとるものが大半で、稀に垂直構成をとるものも存する。羽狀樣 (Rahung) に施文されて殆んど僞繩文 (falsches Flechtwerk) の如きものがあり、又、擦過文 (Wischstrich) もあらはれる。器體の側面形は、やはり急傾斜の側壁を示すものと共に胴腹部のふくれた

側壁のものとあり、平底の採集は極めて僅かで、大體丸底である。別に、分節的斷面形を示して、貼りつけの円形隆起もしくは口緣裝飾ある土器片が多數採集されてゐるが、それは燒成よく大抵把手がある。この種の土器には櫛齒施文とか撚糸施文は僅少で、突瘤②(Lochbuckel)が多くあちはれ、ウラン=ハダの知見からすれば、時期の最も新しい土器類である。

かくて、ユーラシア大陸の北部地帶に廣布するカムケラミークの樣式は普遍的一樣性を示して、オビ河流域の遺物はヨーロッパ=ロシヤ北部から中部シベリヤへの關係を物語り、オビ河とイェニセイ河との間にはそれぞれの支流を通じて文化の波及がなされ、正に、かかる河川組織が文化波及の方向を決定したのである。然しシベリヤのカムケラミークは決して「盛期カムケラミーク」より古く遡るものではない。早くともセンテリュース編年の第三期がその初めであり、大半は漸く同編年の第四期に屬する。ウラン=ハダ出土の典型的刺突文土器(typische Stäbchendruck-Keramik)はムカケラミークとしては、相對的に遲れた時期のもので恐らく新石器時代末のものであらう。然し、「新石器的なるもの」„Neolithikum“傳統は永く存續してゐる。かやうに東部シベリヤに於けるカムケラミークは、性格的には本來のカムケラミークの力は弱くなり、かへつて次の金屬器時代文化に包攝された形で存續してゐるが、新石器時代的傳統の殘存は疑へない。

註

① アイリオ氏の前揭論文と共に、Gerov. Merhart が Reallexikon (Bd. 12) に載せたシベリヤ新石器時代に關する一文 (Sibirien, B.Neolithikum) をも參照。
と共に、前揭「東亞考古學」(シベリヤ) 參照。

② 八幡一郎氏「北海道の突瘤土器」(『考古學論叢』第二輯)・「再び突瘤土器に就いて」(『考古學論叢』第九輯) 參照。

結

典型的なそして整然と幾何學的な、施文構成を示すフィンランドの「盛期カムケラミーク」の文樣要素を分析考察した結果、櫛齒施文(カムッデコール)が決して主導的位置を占めるものでなく、凹窩施文と撚糸施文とに、むしろ從屬的な或ひは後出的な要素として出現して後、並存的位置をとるにいたつたものであることを知つた。これ

が私の指摘したい要點であつた。次いでカムケラミーク發生地と推されるヴォルガ＝オカ兩河地方の場合に於いても、同樣の事實を認め得たのであるが、殊にオカ河流域に於いては、遺跡立地が水邊の砂丘地に選擇されたことをも知ることができた。私の指摘したい第二の點である。何故ならば既に述べて來た樣に、カムケラミークの分布が北方ユーラシヤの廣大な森林地帶とほぼ一致することは、その波及が河川組織を中心として湖沼岸或ひは海岸等の水邊に沿うてであることを推測せしめるからである。然しかやうにして東部シベリヤにまで波及したカムケラミークは、依然として本來の傳統を存續せしめつつはあつたが、むしろローカルな異質文化に包攝されるほど主導力の弱まつたものであつた。これが指摘さるべき第三の點である。

私の論ずべき問題は實はこれからなのである。私の實際に見聞し得るカムケラミークは、滿蒙のそれであり、朝鮮のそれであり、更には日本の所謂「田戸式」土器である。私にとつては從來云々されたカムケラミークが、その形式としての概念は極めてあいまいであつたが故に、本來のカムケラミークの形式が眞に如何なるものであるかを把握せんための一助として、先づこの一文を草したのである。（二三・一一・一五）

戸帖考補遺

曾我部靜雄

私は本誌第十卷第三號に、戸帖についての一文を載せ、その中で元時代に戸帖があつたか否かは知らないと述べて置いた。然るにその後元典章を閲讀した所、同書の中に戸帖についての一記事のあることを發見した。それは卷十七、戸部三、異性承繼立戸の條に、

今次追到萬洪戸帖。查照、與各人所供相同、

とあることで、これは萬洪なるものの後繼者についての爭ひに現はれてゐる戸帖であつて、これは明に家に藏してゐた戸籍謄本の如きものと思はれる。明時代には全く戸帖は戸籍謄本、門牌の如きものになつてゐたが、それは既に元時代からであつたことを知り得るのである。

昭和二十四年十月二日稿了